

東京工業大学 2018年3月1日～10日
超短期海外派遣プログラム（フィリピン）
報告書



目次

0. 地図	5
1. 海外派遣プログラムの目的	5
2. 参加学生の紹介と研修日程	6
2-1. 派遣プログラム日程.....	6
2-2. 参加学生の紹介.....	7
3. フィリピンの概要	13
3-1. 人口.....	13
3-2. 面積.....	13
3-3. 宗教.....	14
3-4. 政治体制と現在の内政.....	14
3-5. 産業などの基礎情報.....	14
3-6. 訪問国・地域の地理.....	15
3-7. 社会・経済・文化的特徴.....	15
3-7-1. 社会的特徴.....	15
3-7-2. 経済的特徴.....	15
3-7-3. 文化的特徴.....	16
4. 訪問先の詳細	16
4-1. デラサール大学(DLSU).....	16
4-1-1. デラサール大学 マニラキャンパス.....	16
4-1-1-1. キャンパスの概要.....	16
4-1-1-2. 講義の概要.....	17
4-1-1-3. 研究室訪問.....	18
4-1-1-4. 学生交流.....	18
4-1-2. デラサール大学 ラグーナキャンパス.....	19
4-1-2-1. キャンパスの概要.....	19

4-1-2-2. 教育施設・研究室訪問.....	20
4-2. タガイタイ(Tagaytay).....	21
4-2-1. 概要.....	21
4-2-2. ピープルズパークインザスカイ(People's Park in the Sky).....	21
4-2-3. ミュゼオオーリナ(Museo Orlina).....	21
4-2-4. スカイランチ(Sky Ranch).....	22
4-2-5. マーケット.....	22
4-3. イントラムロス.....	23
4-3-1. 概要.....	23
4-3-2. ホセ・リサール博物館.....	25
4-3-3. Fort Santiago/サンチャゴ要塞.....	26
4-3-4. サン・アングスティン協会.....	28
4-4. TechAguru.....	29
4-4-1. TechAguru の概要.....	29
4-4-2. 現地訪問をして.....	29
4-4-3. 開発中のセンサーについて.....	30
4-4-4. TechAguru を訪問した所感.....	30
4-5. JICA フィリピン事務所.....	31
4-5-1. JICA の概要.....	31
4-5-2. JICA フィリピン事務所の概要.....	31
4-5-3. 主な支援分野.....	32
4-5-4. 市民参加協力（ボランティア事業）.....	33
4-5-5. 学生と JICA 職員さんとの質問.....	33
4-6. 国立博物館.....	36
4-6-1. 基本情報.....	36
4-6-2. 博物館の建物について.....	36

4-6-3.	Spoliarium について	37
4-6-4.	バスタメンテ総督と息子の暗殺について	37
4-6-5.	その他の展示物について	38
4-7.	ユニカセレストラン	39
4-7-1.	基本情報	39
4-7-2.	活動の背景	39
4-7-3.	活動内容	39
4-7-4.	青少年スタッフとの交流会	40
4-8.	フィリピン大学ディリマン校(UPD)	41
4-8-1.	概要	41
4-8-2.	JICA SATREPS のサイト	41
4-8-3.	ASTI(Advanced Science and Technology Institute)	41
4-8-4.	EEEI(Electrical and Electronics Engineering Institute)	42
4-8-5.	学生交流	42
5.	その他.....	43
5-1.	食事.....	43
5-1-1.	食文化	43
5-1-2.	フィリピン料理	44
5-2.	町の様子.....	45
6.	所感.....	46
<参考>	<参考>.....	55

0. 地図



図 0.1:日本とフィリピンの位置関係



図 0.2:フィリピン全体



図 0.3:主な訪問場所①



図 0.4:主な訪問場所②

(出典:Google マップより)

図 0.1 では日本とフィリピンの位置関係、図 0.2 ではフィリピン全体の外観を示した。また図 0.3,0.4 では今回のプログラムで訪問した主要な場所を示した。

1. 海外派遣プログラムの目的

(担当：馬場)

東南アジアの中でも、特に経済成長著しいフィリピンの中で、経済発展の雰囲気や国際協力の現場を体感する。また自らの専門の他にも様々な分野の授業や研究室訪問を通して、多くの学びを得る。異国の地で積極的に学生交流を図るコミュニケーション能力や語学力の向上も目的としている。

2. 参加学生の紹介と研修日程

2-1. 派遣プログラム日程

日付	活動
	活動内容
3月1日(木)	出国
	マニラ到着後、両替をし、ホテルに移動。その後、買い物
3月2日(金)	デラサール大学マニラキャンパス
	講義受講(統計、高等数学、高等測量、電気回路、情報、水力学、離散数学から各自指定された4コマ)、研究室訪問
3月3日(土)	タガイタイ
	Museo Orlina(美術館)、スカイランチ(遊園地)、市場を訪問
3月4日(日)	イントラムロス、夕食
	イントラムロス見学、デラサール大学の学生たちと夕食
3月5日(月)	デラサール大学マニラキャンパス
	講義受講(プログラミング実習、電気回路実験、単位操作実験から各自指定された1コマ)、キャンパスツアー、学生交流
3月6日(火)	デラサール大学ラグナキャンパス
	TechAguru(本学卒業生のベンチャー企業)
	デラサール大学ラグナキャンパス見学、TechAguru 訪問
3月7日(水)	フィリピン大学ディリマン校
	JICA SATREPS プロジェクトサイト見学、フィリピン大学ディリマン校見学
3月8日(木)	JICA フィリピンオフィス、国立博物館、ユニカセレストラン
	JICA 訪問、国立博物館見学、ユニカセレストランにて夕食・交流会
3月9日(金)	反省会
	フィリピン大学ディリマン校
	ホテルにて反省会、学生交流
3月10日(土)	帰国

3. フィリピンの概要

3-1. 人口

2015 年のフィリピン国勢調査によるとフィリピン国内の人口はおよそ 1 億 98 万人である。日本の人口は 1 億 2709 万人である。マレー系の人種が主であり、他に中華系とスペイン系、これらとの混血や少数民族も人口に含まれている。首都マニラの人口はおよそ 1288 万人である。

以下にフィリピンの人口ピラミッドの図を挙げる。途上国で特有のピラミッド型となっている。また、ユニカセで得た情報では戸籍に登録されていない児童が多数存在するため実際はさらに若年層に分布が偏っていることになる。

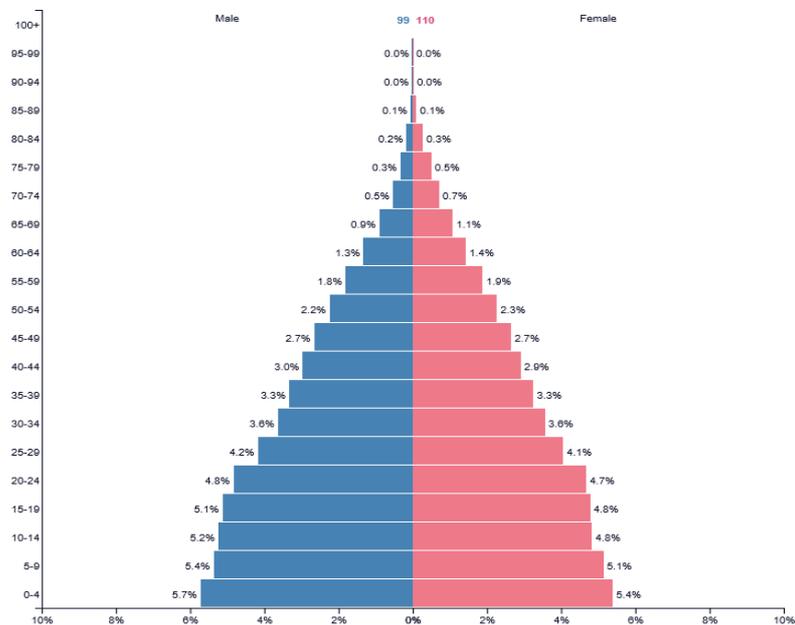


図 3.1 フィリピンの人口ピラミッド 2016

3-2. 面積

外務省のデータによるとフィリピンの国土面積は合計 299,404km²。今回拠点としたマニラもあるルソン島はフィリピンで最も大きな島であり、ミンダナオ島がそれに続き二番目に大きな島となっている。

	面積
フィリピンの国土	299,404km ²
日本の国土	377,972km ²
Luzon 島	104,688 km ²
Mindanao 島	94,630 km ²
北海道	83,423 km ²

3-3. 宗教

ASEAN で唯一のキリスト教国である。国民のおよそ 83%がカトリック信者でその他キリスト教徒がおよそ 10%、イスラム教徒がおよそ 5%、ミンダナオ島においてはイスラム教徒が人口の 2 割を占める。

3-4. 政治体制と現在の内政

フィリピンの政治体制は立憲共和制であり、上・下二院制である。大統領、副大統領共に任期は 6 年である。現在の憲法は 1986 年のマルコス独裁政権が崩壊後に制定された。国家元首は 2016 年 5 月 9 日以降現在ロドリゴ・ドゥテルテ大統領が務めている。彼は初のミンダナオ出身の大統領である。違法薬物・犯罪の改善に尽力しており、連邦制導入のために憲法改正も目指している。

3-5. 産業等の基礎情報

フィリピンの主要産業の一つとして、全就業人口の 27%が従事している農林水産業を挙げることができる。農業生産はコメやトウモロコシ等の国内向けの食糧作物と、サトウキビやココナッツ、バナナ等の輸出用換金作物に大別される。また、近年は全就業人口の 56%が従事しているサービス業が大きな力を持っている。業務内容はコールセンター事業等のビジネス・プロセス・アウトソーシング産業や、観光業、さらにオンライン英会話講座の事務所も多く存在する。

フィリピンは主にアジアやアメリカと盛んに貿易を行っている。主要輸入品目として原料・中間財、資本財、燃料、消費財等がある。また、主要輸出品目として電子・電気機器、輸送用機器等を挙げることができる。このように、現在フィリピンは原料を輸入して製品を輸出する加工貿易の体制を築きつつあるのである。

3-6. 訪問国・地域の地理

フィリピンは東にフィリピン海、西に南シナ海、南にセレベス海に囲まれた島国であり、南北 1,851km にわたって散在する 7000 を超える島々から構成されている。うち約 1,000 島には居住者があり、このうち 2.5km² 以上の面積を有するのはこの半分以下の島である。今回の超短期派遣で滞在したマニラがあるルソンに加えてミンダナオ、ミンドロ、サマル、レイテ、セブなどの 11 の島が国土の面積の 96% を占めている。低緯度の東南アジアに位置するので年中高温多湿の熱帯モンスーン気候が特徴的である。南西モンスーンが吹く 5～11 月は雨季であり、スコール性の降雨や台風の襲来等に注意が必要である。南部のミンダナオは熱帯雨林気候である。

3-7. 社会・経済・文化的特徴

3-7-1. 社会的特徴

フィリピンの治安の程度は、場所によって大きく異なっている。首都マニラの大学やショッピングモールなど大型の施設周辺では未然に不慮の事故を防ぐ試みがなされている。施設に入る際には荷物の検査、ボディチェックを通過しなければならない。このような試みによって、不審な人物を多くの人々がにぎわう場所に近づかせないようにしている。一方で、周辺部にはスラム街と呼ばれる貧困層の人々が暮らす治安が維持されていない地域も存在する。このような地域には観光客として近づくことは極めて危険である。

都会部の道路は常に車で込み合っている。信号が設置状況は不十分であり、慢性的な交通渋滞が続いている。道路を横断する際に、歩行者は車が来ないタイミングを見測らなければならない。ただし、フィリピンの運転者は横断歩道がない道路でも歩行者を優先して減速してくれる場合が多い。

3-7-2. 経済的特徴

フィリピン経済は、1960～1990 年代にかけて長期低迷に陥っていた。しかし近年は比較的好調であり、2012 年以降の経済成長率は ASEAN 主要国の中でもトップクラスに位置する。需要面では個人の消費が景気拡大に大きく貢献している。それを支えているのが在外フィリピン人労働者(OFW)からの送金である。

一方で、フィリピンは所得格差が大きく、格差縮小への糸口もつかめない状態である。また、フィリピンは近隣諸国に比べて海外からの製造業への直接投資流入が少ない。このため雇用創出が不十分であり失業率が高く、1000 万人もの OFW が海外で働かざるを得ない状況を作り出している。

3-7-3. 文化的特徴

フィリピンではバスケットボールやバレーボール、水泳を始めとするインドアスポーツが盛んである。というのも、フィリピンは一年中気温が高く湿っているので屋外での長時間の活動は体力を消耗しやすくなるためである。大学やショッピングモールといった大型の施設には屋内の運動場が取り付けられている。また、学生をはじめ、多くの人が趣味としてマンガやアニメを好んでいる。その中には我々にもなじみ深い日本由来の作品が多く含まれている。このようなマンガ等は我々日本人と現地の学生との交流では共通の話題としてしばしば用いられる。

4. 訪問先の詳細

4-1. デラサール大学

4-1-1. デラサール大学 マニラキャンパス

4-1-1-1. キャンパスの概要

デラサール大学は1911年に設立されたキリスト教カトリック系の私立大学である。マニラキャンパスはマニラ市の中心部にあり、目の前には大通りや鉄道が通っているなど交通の便の良い場所に立地している。フィリピンの大学の中でもトップレベルの名門大学であり、研究環境・学内施設も充実している。法学部・教育学部・工学部など8学部36学科で構成されており、生徒数は約16000人、留学生の数は約600人と国際色豊かな大規模な大学である。男女比は約1:1であり、理系学部でも比率に大きな差はないため東工大と比べて華やかな光景が広がっている。また年間当たりの学費が約20万円(平均家庭年収40万円)とフィリピンでは非常に高額であり、出会った学生は裕福な学生が多い印象を受けた。

マニラキャンパス内には自然豊かな広場や中庭が広がっていて、数多くの猫が広場で寛いでいる姿も見かけた。キャンパスの中心には100周年記念で建設された15階建てのメタリックな風貌の図書館がそびえたっており、古風な建物がそれを取り巻くように立地していて、近代・現代建築と自然がうまく融合されている印象をうけた。図書館には学生の勉強フロアや昼寝ができるスペースもあるなど学生のニーズに沿った工夫が施されていた。この他にも2箇所の食堂や運動施設、美術館、教会など多種多様な施設があり、学生のキャンパスライフを充実させている。



図 4.1.1.1: マニラキャンパス図書館外観



図 4.1.1.2: 部活動の様子



図 4.1.1.3: 食堂 la Casita 外観



図 4.1.1.4: 食堂 la Casita メニュー

4-1-1-2. 講義の概要

今留学では、私達は専門が異なっているため、様々な科目の基礎的な授業に参加した。最初に皆で統計学の授業を受けた。そこでは英語での授業であるにもかかわらず、積極的に発言していて、東工大生の理系科目の能力の高さを発揮する事ができた。その後はグループに分かれ、システムデザイン学、流体力学、アルゴリズムなどを学んだ。システムデザイン学の授業は、2つのグループで与えられたテーマについてディスカッションする形式の授業であった。英語で考えたことを聞いている人に分かり易く伝えることは難しく、物事を説明する能力の必要性を感じた。最初の授業が7時30分に始まる事や、またフィリピンの学生達の主体的かつ能動的に授業に臨む姿が非常に印象的であった。



図 4.1.1.5:統計学の授業風景



図 4.1.1.6:ディスカッション風景

4-1-1-3. 研究室訪問

2日目には東京工業大学 M1 の武石さんも所属する研究室を訪問した。その研究室は、ロボット工学を医療分野に応用した AgapayProject に携わっていた。例えば、指が自由に動かすことができない人のリハビリに用いられる器具の開発をしており、私たちはその器具の説明を受け、実際に体験した。特に、患者の視線に立ち、リハビリのモチベーションを上げるためのゲームの開発などにも注力していることに非常に感銘を受けた。



図 4.1.1.7:リハビリに用いられる器具

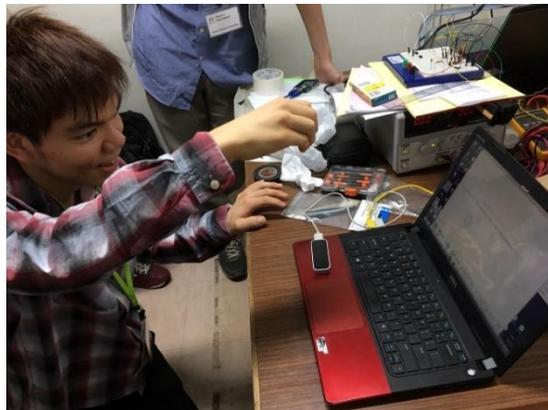


図 4.1.1.8:センサーを利用したゲーム

4-1-1-4. 学生交流

デラサール大学では電気電子工学科の学生と交流する事が出来た。授業間の移動の案内や、昼食、キャンパスツアーなど、我々のキャンパスライフのサポートをしていただき、大変感謝している。彼らは皆とても親切で、気さくに我々に話しかけてくれた。9日目の夜には、夕食を共にし、とても盛り上がった食事会となった。

また、5日目には日本研究会の学生と交流会を行った。彼らはデラサール大学の紹介の他

にも、フィリピンのダンスやスラングなど興味深い発表をしてくれた。

この他にも、各授業で一緒になった学生など、多くの友人を作る事ができた。今後もfacebookなどでのやり取りを続け、交友関係を保っていきたい。



図 4.1.1.9:電気電子工学科学生との記念撮影



図 4.1.1.10:日本研究会学生との交流会

4-1-2. デラサール大学 ラグーナキャンパス

4-1-2-1. キャンパスの概要

デラサール大学ラグーナキャンパスは主に科学と技術のプログラムを提供している。2003年にデラサールカンルーバンとして設立され、2012年にデラサール大学と統合し現在の組織となった。幼稚園から大学までの一貫校として人材を育成する事で、国の科学技術における進歩に大きく貢献すると期待されている。近隣のLaguna Technoparkには多くの企業の会社や工場があり、企業との共同研究を行うことが可能となっている。



図 4.1.2.1:車ででの広大なキャンパスの移動



図 4.1.2.2:広大な運動場での記念撮影

4-1-2-2. 教育施設・研究室訪問

STC は理系学生の育成に力を注いでおり、様々な特色ある教育が行われている。例えば、elementary school の授業では、日本の中学 2 年生にあたる学生が必修授業としてプログラミングを学習していた。この授業は、おもちゃのブロックとモーターでできた小さなロボットをプログラミングによって制御し運動させるもので、中学生でも簡単にプログラミングを理解できるように色付きのコマンドを連結するだけでロボットを制御できるような工夫がされていた。この他にも早い時期から理系的素養を身に着けることのできる授業が多く実施されており、理系に特化した人材育成を目指す教育が行われている。また理系学生育成だけでなく各学生の個性も重要視しており、音楽室・製図室・図書室・広大な運動施設など、充実した設備を整えることで、多種多様な学生を育成することを目指している。

大学施設では電気電子工学科の研究室と生物学の研究室を見学させていただいた。電気電子工学研究室では電気回路を応用した発電システムの構築や人の手に反応するセンサーの開発などの研究を行っていた。また生物学の研究室では、カカオの鞘に寄生し形態異常を引き起こす害虫やゴキブリの卵を食べる害虫の観察による殺虫剤開発への応用に関する研究を主に行っていた。これらの研究は、電気インフラ整備や食糧不足問題の解決に寄与する内容であり、途上国の抱える大きな問題に役立つ非常に興味深いものであった。



図 4.1.2.3:プログラミング授業風景



図 4.1.2.4:小中学生用図書館の様子



図 4.1.2.5:電気電子工学科研究室訪問風景



図 4.1.2.6:生物学研究室訪問風景

4-2. タガイタイ(Tagaytay)

4-2-1. 概要

タガイタイとは、マニラ都市部から南部へ約 64km、カビテ州の標高 700m の高地一帯を指し示す。標高が高いということもあり、タガイタイの気温はマニラと比べて涼しくなる。今回のプログラムではピープルズパークインザスカイ、ミュゼオオーリナ、スカイランチ、そしてマーケットに訪問した。それぞれの場所で、都会部とは異なったフィリピンの一面を見つけることができた。

4-2-2. ピープルズパークインザスカイ(People's Park in the Sky)

タガイタイの中で我々が初めに訪問した場所である。入場ゲートから数分歩いたところに展望台がある。ここはタガイタイの中で最も標高が高く、周囲の景色が一望できる。北東側にはフィリピン最大の湖であるラグナ湖を望むことができる。一方で南側にはタール湖およびその中心に位置するタール火山が見える。この展望台にはキリスト像が置かれており、カトリック教会の影響がこの地にも及んでいることが確認できる。また、場所によってはジープニーに乗車することが可能であり、乗馬体験を行える場所もある。訪問した日が土曜日であったということもあり、多くの家族連れでにぎわっていた。

4-2-3. ミュゼオオーリナ(Museo Orlina)

タガイタイの中にあるガラス工芸品の美術館である。この美術館にはラモン・オーリナ(Ramon Orlina)の作品が所蔵されている。彼はフィリピンのガラス工芸の先駆者として、かつては窓や食器など日用品として使用されていたガラスを用いて自身の美を追求した。彼

は作業の工程で火を使わず研磨のみにより作品を生み出したので、彼のガラス作品の内部は自然本来の状態を保っている。館内に様々な大きさおよび形の作品が収められているほか、芝生が植えられた中庭にも美しいオブジェ、また音楽イベントのためのステージが設けられている。さらに、スーベニアストアにはミュゼオオーリナのデザインの商品が取り揃えられている。実際、この美術館の作品に感銘を受けた学生はオリジナルの T シャツを購入していた。

4-2-4. スカイランチ(Sky Ranch)

スカイランチはタガイタイにあるアミューズメントパークであり、家族連れやカップル等にぎわっている。園内はジェットコースターやフリーフォールなど様々なアトラクションが設置されている。アトラクションを楽しむには園内への入場料の他に一つあたり 100～150 ペソの料金を支払う必要がある。観覧車やバイキングなど、高い場所に到達できるアトラクションに乗るとタール湖に浮かぶタール火山を一望することができる。また、アトラクションの他にも園内では様々なエンターテインメントを楽しむことができる。各所にいるコスプレをしているキャストとは記念撮影ができ、中には決闘ごっこをしてくれる海賊の格好をしている人もいる。また、バスケットボールのフリースロー、鉄棒につかまったまま 2 分間耐久するゲームなど、客自らが参加することができるタイプのゲームも楽しめる。日差しが強い点には注意すれば、一日中楽しめる場所であるはずだ。

4-2-5. マーケット

タガイタイには現地の人だけでなく観光客もターゲットにしているマーケットがある。一階部分ではコーヒー豆や米、土産品などに加え、生の肉や魚、フルーツが店頭で陳列されていて、売主と客でにぎわっている。また、軽食を販売する移動式の屋台も複数ある。二階は主に食堂となっており、タガイタイ名物のブラロ（牛筋を煮込んだスープ）を楽しむことができる。食堂では日本で売られているものよりも小さめのサイズのバナナが食べ放題となっているため、料理が来るまでの待ち時間の間もフィリピンの美食を楽しむことができる。



図 4.2.1 : タール湖とタール火山



図 4.2.2 : ミュゼオオーリナの展示



図 4.2.3 : スカイランチ



図 4.2.4 : マーケットの肉売り場

4-3. イントラムロス

4-3-1. 概要

イントラムロスとはマニラの中でも最も歴史のある地区であり、その歴史はスペイン統治時代にまで遡る。この地はスペイン統治の中心地であり、それ故に多くの遺跡・史跡が残っている。即ちイントラムロスはフィリピンの歴史の詰まった場所であり、イントラムロスを訪ればフィリピンの歴史への理解が深まるだろう。

大航海時代において、スペインはアジアにおける交易の地としてフィリピンを手に入れることとなる。スペインのミゲル・ロペス・デ・レガスピ(初代総督)は 1565 年にセブに根拠地を設置、その後地域交易の中心地であったマニラを攻撃した。1571 年にはマニラ市を設置した。その際の中心地がこのイントラムロスだったわけである。現在のイントラムロスにはサンチャゴ要塞やマニラ大聖堂、サン・アグスティン教会などが残されており、マニラの人気観光地となっている。

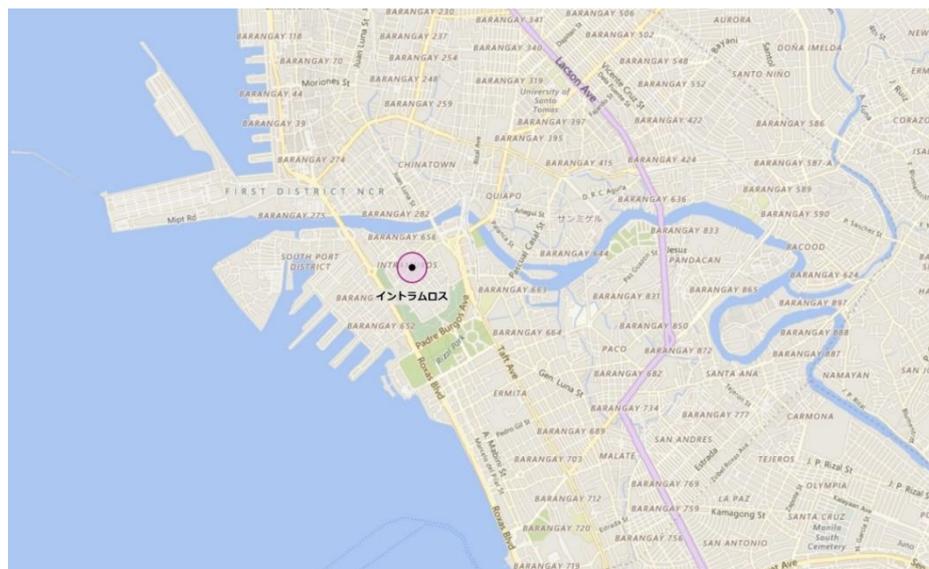


図 4.3.1 : マニラにおけるイントラムロスの位置

私たちがイントラムロスを訪れたのは4日目の3月4日である。この日は気温が30度近くあり、Tシャツ一枚でも暑かった。ホセ・リサール記念館、サンチャゴ要塞のある地区は入場料が50ペソであった。その入場券を買おうと並んでいる途中、メンバーの松本君、いきなり物売りのおじさんに帽子をかぶせられる。そう、イントラムロスは観光地だけあって物売りの人が多くいるのだ。風船や帽子、サングラスを門の前で売っているが、その売り方は日本よりも積極的だ。結局松本君、帽子を購入。日差しが強かったからちょうど良かったのかもしれない。中に入るとそこには大量の現地の学生(おそらく中学生)が。社会科見学でイントラムロスを訪れたらしいが、話を聞くと一校訪れるだけで大型バス42台という。少子高齢社会の日本には考えられない光景であり、改めて東南アジア諸国の勢いを感じると共に少し日本の未来について不安を感じるのだった。その学生たちが私たち一行を見るたびに「こんにちは」「アニハセヨ」「你好」と挨拶してくる。聞くと東アジアの国々はフィリピンでは人気があるらしい。(一番人気は韓国らしいが)戦後アメリカに追い付け、追い越せと成長していた日本も昔はこんな感じだったのだろうか。その後、最初にホセ・リサール博物館に入る。



図 4.3.2 : イントラムロス内部①



図 4.3.3 : イントラムロス内部②

4-3-2. ホセ・リサール博物館

ホセ・リサールは 19 世紀後半にスペイン植民地下のフィリピンにおいて「祖国」としてのフィリピンを想像し、そのために詩と文学によって戦った人物である。そしてそれ故にフィリピンの国民的英雄となった人物である。彼は 1861 年ラグナ州カランバ町の裕福な一家に生まれた。セント・トマス大学に入学後、スペインへと留学する。そこでの生活はリサールに「祖国フィリピン」を意識させるものであった。そうして彼は植民地統治の不正を訴える活動に参加し、植民地政策改革を訴え始めるのである。1887 年、彼は自らの著作「ノリ・メ・タンヘレーわれに触るな」によって植民地政府とカトリック聖職者の腐敗、腐敗に苦しむフィリピンの実態を明らかにした。この当時、リサール自身はフィリピンの改革に必要なのは教育と考えていたが、続く 1891 年に出版された彼の著作「エル・フィリボステリスモ」では、もはやスペインからの分離独立が必要であると主張するようになる。彼の活動は反植民地運動を刺激し、フィリピン革命が起こる一因となる。しかし彼は革命運動を扇動したとして 1896 年に処刑されてしまう。彼の死は後の人々に大きな影響をおよぼしより大きな反植民地運動へとつながっていくのだった。歴史家がこれについてどのような判断をしているかはわからないが革命家を処刑するとは、スペイン政府はわざわざ自らの手で英雄を生み出したようなものであるとしか思えない。なんとも軽率ではないかと思う。特にキリスト教文化の中ならなおさらではないか、と思うのである。事実、リサールは晩年の自身をキリストと重ね合わせていたようである。

博物館に入るとリサールに敬意を込め脱帽を求められた。フィリピンの人々のリサールに対する尊敬の念が伝わる一幕であった。博物館では学芸員の方が解説をして下さったが、如何せん学生が大量にいたため解説がなかなか聞こえなかったのが残念である。ただ、リサ

ールの生い立ち、革命家としての活動、晩年などホセ・リサールについてなど深く知ることのできる場所であった。このように国民的英雄であるリサールであるが、一方の日本においては英雄と呼べる人物がいないのは興味深いことである。アメリカではワシントン、フランスではナポレオンが英雄として挙げられようであるが日本において万人が納得するような英雄はいない。この話を移動するバンの中で話したがその理由の一つとして挙げたのは「日本では英雄を必要とするような劇的な社会の変化がなかった」というものである。確かにあるかもしれない。しかし、私は劇的な変化のきっかけが日本人ではなかったからではないかと思う。ペリー来航にしても第2次世界大戦の敗北にしても結局国家が動いたような変化は外国によるものであった。それに対し、アメリカやフランスは(もちろんフィリピンも)国の内側からの変化であった。それ故に国民的英雄が生まれたと考えられないだろうか。話は脱線したが、このように改めて日本を見直すことが出来るのもこうして海外を訪れたからだと思う。これもこの短期派遣の効果の一つではないだろうか。



図 4.3.4 : 多くの学生で賑わうイントラムロス



図 4.3.5 : ホセ・リサール博物館外観

4-3-3. Fort Santiago/サンチャゴ要塞

サンチャゴ要塞はもともとスペインが外敵(海賊や他国)から身を守るために作った要塞であった。初期のものは木や土などでつくられた簡素なものだったが、後に石積の重厚なものとなった。時の流れとともにこの施設の用途は軍事拠点から刑務所に、さらに所有者もスペインからアメリカ、そして日本に移ったわけである。そのため、処刑される前のホセ・リサールはここに囚われており、ここから処刑場に向かったという過去もあれば、旧日本軍が終戦間際に現地の反日本軍活動者を殺害したという過去も持っている。本来のサンチャゴ要塞自体は第二次世界大戦の末期、米軍と日本軍の戦いにより多くが破壊されてしまったため、現在の門などは修復されたものである。

ホセ・リサール博物館をあとにした私たちはそのままサンチャゴ要塞を訪れた。私たちがサンチャゴ要塞を訪れた時には、どうやらサンチャゴ要塞で芸術祭が行われていたようで史跡内には様々な芸術作品が置かれていた。そのためか、サンチャゴ要塞の入り口に以下のような写真が置いてあった。なんとエッジのきいた写真だろうか。無論ジョークであると思うが、残念ながら何の説明もなかったので、果たしてこの写真が何を意味しているかは分からなかった。だがこの写真によって日本が占領者だったという過去がはっきりと思い出された気がした。

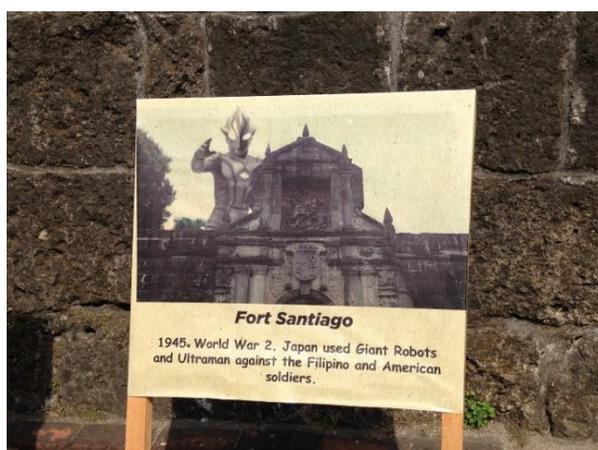


図 4.3.6 : サンチャゴ要塞入口写真

サンチャゴ要塞で一番印象的だったのがホセ・リサールの足跡である。これはホセ・リサールが囚われていたこのサンチャゴ要塞から処刑場(現在はルネータ公園)まで続いているものである。この足跡がどこまで史実を基にして作られているかはわからないが、実際にこの足跡をたどってみると、とにかく歩幅が小さいことに気づく。処刑場に行きたくない、というホセ・リサールの気持ちが伝わってくるようだった。



図 4.3.7 : ホセ・リサールの足跡



図 4.3.8 : サンチャゴ要塞の入口

4-3-4. サン・アグスティン教会

サン・アグスティン教会はサンチャゴ要塞のある地区から車で 5 分ほどのところにある教会で現在の建物は 1710 年に完成したといわれている。現在は世界遺産にも登録されている。

私たちがサン・アグスティン教会を訪れた時には中で洗礼が行われていたようで教会自体には入ることができなかった。そのため、その隣にあるサン・アグスティン教会博物館を訪れた。入場料は 160 ペソ(約 320 円)であったが、博物館自体の圧倒的な展示量に比べると非常に安いものだと思う。サン・アグスティン教会は教会であるが故にたくさんの聖像があった。しかし、その中で手のない像が多々あった。学芸員の話によると、フィリピンが一時的にイギリスに占領されたときに、聖像の手の多くが象牙でできていたため奪われてしまったという。また、特に私たちを驚かせたのは、聖歌の楽譜である。大きさが座布団くらいある楽譜である。この大きさ、厚さで一曲分だということからなお驚きである。また、スペインの植民地であるがゆえの物もあった。写真の聖職者の服は、糸が純金でできているという。これらの貴金属は主に南米から運ばれたものだという。ここでも大航海時代のスペインの栄光を見て取ることができた。それに関連して日本から輸出されたという陶磁器も展示されていた。祭壇の花瓶として使われていたようだが、どのくらいこの教会のデザインにマッチしていたかは不明である。貿易の要所であったマニラらしいものである。



図 4.3.9 : 金の糸が使われた服



図 4.3.10 : 日本から輸入されたという壺

4-4. TechAguru

4-4-1. TechAguru の概要

TechAguru は東工大を卒業したフィリピンの方が立ち上げたベンチャー企業である。このフィリピンの会社は小さな農家が安定してフィリピンの人々に食べ物を供給できるようにロボットや作業の自動化の側面から手助けすることを目的としている。メンバーはフィリピン人のメーカーとエンジニアから成っていて、この会社はまだ実験、開発段階であるが共通のゴールを目指す機関との協力も行っている。結成された 2014 年から 5 年以内にまとまったチームを作り上げることを目標としており、ソフトウェアの分野で地域の人材の育成にも努めている。現在、初めに述べた目標を果たすためセンサーの開発に力を入れている。

4-4-2. 現地訪問をして

私たちはフィリピン滞在の 6 日目となる 3 月 6 日にこの会社に赴いた。はじめに想像していたよりも小さめのオフィスであったが社員の方々は私たちを暖かく迎え入れてくれた。はじめに社長によるプレゼンを聴き、そのあとで質問をする時間を頂きプレゼンに関してだけでなく会社の成り立ちやベンチャーを立ち上げる心得などさまざまなことを聞かせていただいた。その後しばらく雑談して社内を見学させてもらい TechAguru を後にした。プレゼンは会社の理念からはじまり、開発しているセンサーのプロジェクトがどのようなものかという説明を聴かせていただいた。その後の質問タイムでの質問を一つ紹介すると、「社長になるには何が必要か」という問いに対して TechAguru の社長は先生であること、問題を解決すること、リーダーシップ、仲間を持つこと、活動を発信していくこと、学び続けること、最後に良く寝ることを挙げていた。他にもさまざまな質問をさせていただきその全てに快くお答えして頂き、とても有意義な時間を過ごすことができた。

4-4-3. 開発中のセンサーについて

まずプレゼンのはじめに社長はフィリピンの小さな農家の手助けをするにはいきなり高度な技術を用いてはいけなく適正技術を心がけて開発することが大事であると述べていた。そのため彼らは時代を揺るがすような新発明を目指してはおらず、質素でも役に立つ発明を心がけていると述べていた。彼らが解決しようとしている問題は農家には欠かせない農業用水が現在のフィリピンでは整ってなく、効率の良い農業が行えていないという問題である。開発しているセンサーというのはこの第一段階に使用するものであり、下の写真

に示すようなセンサーを農地に挿して水量のデータを入手するためのものだ。その後の段階では得たデータを活用して問題解決に望んでいくと述べていた。彼らは現段階としてフィリピン全土に目を向けるのではなく **Balanga City** を最初の目標としてプロジェクトを行っている。

4-4-4. TechAguru を訪問した所感

今回私たちは海外のベンチャー企業を訪れるというとても貴重な経験をすることができた。そもそも私は日本のベンチャー企業を訪問したことが無く違いが明瞭に分かるわけではないが、国が違えば企業が考えるべきこともまったく違うのだろうと思った。将来海外で働くことがあるとしたら日本での常識を押し付けないことを心がけたい。さらに私が感動したのは社長が一番楽しいことは何かと問われたときにこの会社で仲間とともに働くこと答えていたことで、社長は本当に楽しそうに私たちに会社のことを紹介してくれていたの自分好きなことで仕事を出来ているのだと思った。社員の方々も本当の家族のような温かい雰囲気でもとても羨ましく感じた。最後に今回の訪問で今まで自分の中で不透明であった海外で働くということが具体性を帯びてきた事が良かったと思う。言語の壁はあれどちゃんと大学で学んでいれば海外の会社で働くことも不可能ではないと感ずることが出来たので在学中に海外インターンシップに挑戦し、そのために日々の学習で自分に自信をつけていきたい。



図 4.4.1 : プレゼンを聞く様子



図 4.4.2 : センサーの試作品

4-5. JICA フィリピン事務所

4-5-1. JICA の概要

JICA とは Japan International Cooperation Agency（独立行政法人国際協力機構）の略称である。1960 年代以降活発化している政府開発援助（ODA）の流れの中で、国と国が直接援助の関係を結ぶ二国間援助に携わる機関として 2003 年に発足した。

主な活動はこの後の章で述べていくが基本的には開発協力大綱「国際社会の平和・安定・繁栄に貢献することを目的として開発協力を推進する。こうした協力を通じて、我が国の平和と安全の維持、更なる繁栄の実現、普遍的価値に基づく国際秩序の維持・擁護等の国益の確保に貢献する」の目的に基づき、①人材育成、制度構築のための技術協力 ②一定の所得水準以上の国を対象とした大規模インフラ整備のための有償資金協力 ③所得水準が低い途上国を対象とした無償資金協力 等の活動を主に行っている。

その他、青年海外協力隊派遣などのボランティア事業の支援、JICA 基金による寄付金の運営、日本国内における開発教育の実施、大規模災害に際する国際緊急援助隊の派遣等手がける活動の範囲はとても広い。

4-5-2. JICA フィリピン事務所の概要

フィリピンへの援助方針は下記の方針に沿って行われている。

- ① 投資促進を通じた持続的経済成長
 - ・ 持続的経済成長に向けたインフラ整備
 - ・ 投資環境改善

- ② 脆弱性の克服と生活・生産基盤の安定
 - ・ 災害リスク軽減・管理
 - ・ 食糧安全保障
 - ・ セーフティネットの整備

- ③ ミンダナオにおける平和と開発
 - ・ 紛争影響地域の平和と開発

4-5-3. 主な支援分野

【運輸インフラ】

マニラ首都圏近郊の主要都市であるスービック-マニラ-バタンガス回廊（SCMB 回廊）を

整備することで現在一極集中しているマニラの都市化への対応として都市スービック、バタンガスなどのマニラ周辺の市へ機能を分散する、特に深刻化する交通渋滞に対応するための支援等を行っている。

主な支援内容は都市圏拡大及び鉄道、地下鉄建設を提唱するロードマップの策定、各種インフラの整備である。また、マニラ湾に港が集中していることによる海上渋滞、マニラ空港への航空機の集中による航空渋滞への対応も手掛けている。

【農業・農村開発】

フィリピンにおける農林水産業は国内就労人口の 30%を占めるが GDP は 12%シェアにとどまり、農林水産に携わる国民は貧困層ばかりである。JICA は主に農産物収穫後ロスの削減や付加価値向上のために農産物の加工や流通の改善などのバリューチェーンの構築や営農技術の強化などを行っている。

【教育】

幼稚園、小中高基礎教育 12 年を導入するための教育制度改革「K+12」の実施がおもな活動である。具体的な支援は技術職業教育、工学系教育のためのネットワーク構築、災害リスク軽減・管理能力の強化を行っている。またネットワーク構築の支援の一つとして多国間工業大学支援「シードネット」と呼ばれるものがあり東京工業大学もそれに参加している。

【ミンダナオにおける平和と開発】

2006 年より国際停戦監視団 (IMT) に人材を派遣している。紛争影響地域の平和と開発支援が行われている。ミンダナオ島の中部および西部は多数のイスラム教徒がおり他地域と比べ開発が遅れている。主な支援は人材育成、産業振興とそのためインフラ整備、またバンサモロ自治政府の設立に向けた開発計画が行われている。

4-5-4. 市民参加協力 (ボランティア事業)

青年海外協力隊事業は 2015 年に発足 50 周年を迎えたボランティア派遣団体である。看護士隊員、野菜栽培隊員、コミュニティ開発隊員、デザイン隊員など住民の生活に深く関わる部分での支援を行っている。

4-5-5. 学生と JICA 職員さんとの質問

ここから先は学生から JICA 職員の方々への各質問とそれに対するアンサーをまとめたものである。

Q1.台風への対策を強化している中なぜ地下鉄を建設しようとしているのか？

A1.台風等の災害に強い建設を行っているために問題はない。水が地下に入らないような建設様式を採用していてこの建設技術は同じく台風の多い日本のものであるので信頼度は高い。

Q2.各途上国への支援の割合は外交的な背景、つまり日本の依存度によって決まることはあるのか？

A2.日本国政府への支援を頼む際に支援の見返りとしての利益がでにくい地域への支援を断られたことはある。

Q3.発展途上国で働く魅力は？

A3.A さん「フィリピンではライフワークがしっかりしている。出産や子供の世話などが日本に比べて楽、公私の境目があまりない人が多い。」

B さん「途上国は言葉が通じて生活環境の差が大きいことが多い。しかし逆に共通しているところが見つかった時に感動する。日本からの距離が遠くなればなるほどその感動も比例して大きくなる。」

A さん「人間としての根本のところと同じものがやはりあってその話になるととても盛り上がれて楽しい。旦那の悪口とか(笑)」

Q4.日本が途上国に資源・エネルギー・労働力の面で依存しているのは逆に途上国のビジネスチャンスでもある。途上国のもつそれらの資源を基にしたビジネスへの支援はしているのか。

A4.労働市場に関して JICA からは人材育成という面で貢献している。

Q5.ドゥテルテ大統領になってから政府に話が通りやすいか？

A5.ドゥテルテ大統領は親日家なので政府内で話が通りやすくなっている印象はある。ドゥテルテ大統領の出身地で JICA の顔の見える援助が行われていたのが大きいのではないかと。

Q6.JICA の活動が成功するにつれて JICA の活動は必要なくなるかもしれない。JICA としての理想は何か？

A6.最終的には今行っている支援の必要性がなくなるのは理想。但し社会状況の変化に応じて開発協力大綱も少しずつ変化する。それに応じて JICA の必要性も形を変えていくと思われる。

Q7.ミンダナオにおける国際停戦監視団の仕事はどのようなことをしているのか？

A7.各国からの支援団体が提携して和平交渉のために活動している。

Q8.ミンダナオでの支援に関して政治的な問題が起こった際に JICA はどこまでその問題にコミットしていいのか？

A8.反政府勢力トップと JICA との会談に元理事長が直接挨拶しに行ったことはある。日本という国は宗教的にも外交的にも非常に中立的な国で JICA もその立ち位置で関わることはできている。

Q9.フィリピンでは大規模な麻薬市場と犯罪シンジケートが存在していると思われるがその問題に関する解決策のひとつとして武力を使うことはあるのか？

A9.JICA は武力を使うことはしないが武力を使わない解決法を取ることはある。麻薬取引の横行していた地域において NGO や草の根隊員の協力で麻薬組織の主な構成員となっている子供たちに違う生き方を示す事で、組織解体までつなげたという事例はある。

Q10.途上国開発をする上で蓄積された支援経験を基にしたマニュアルはあるのか？

A11.JICA ナレッジサイトと呼ばれるサイトがあり、今までのプロジェクトの詳細をまとめたものはある。国際開発においてマニュアルを基にした解決方法を使用することで成果を得るのが難しいことは 1980 年代に全世界の共通認識となっていて現地の人々との情報共有を経て活動するのが基本。事業が成功したかを測るための方法等はマニュアル化されている。

Q12.農産品の開発に関してバイオテクノロジーの技術協力というと農作物の遺伝子組み換えが行われていると思われるが、アフリカにおいてはキリスト教徒の多くが遺伝子組み換えを問題視している。同じくキリスト教を国教とするフィリピンにおいて遺伝子組み換えに関わる宗教的倫理問題をどのように解決しているのか。

A12.まず事実として糖尿病患者が国家問題となっているフィリピンにおいて遺伝子組み換えされた低タンパク質米は実際に非常に大きな成果を上げているが遺伝子組み換えについての反対意見は今のところでない。

Q13.日本からの中小企業支援で実際に成果を上げているものは具体的に何かあるか？

A13. フィリピンではスマートフォンが広く普及していて free Wi-Fi も同じく普及しつつあるため日本の教科書を販売している啓林館が関わる事業の一つとしてスマートフォンのアプリを利用した教育方法を導入しようというものがある。また、養殖漁業において台風が来るといけずが流されてしまうという問題に関して、台風が来た際に海面下に沈めて波の影響を避けるという機能を備えたいけずをできるだけ安価に生産しようという日本企業主体の事業がある。

Q14.日本の中小企業支援に関して JICA はどのようにサポートするのか？

A14.日本の中小企業から派遣される人材の中にはフィリピンが初めてだという人や事業の進め方についてアドバイスを聞きに来る人もいるためそのような人々のサポートを行っている。

Q15.フィリピンでの世界的な海上流通に関する支援はどうなっているのか。

A15.非常に重要なテーマではあるが今研究段階なのでまだわからない。

Q16.海外協力のための JICA からの情報提供はどのように受けることができるのか？

A16.日本の JICA 支部や地球広場、認定を受けた NGO 団体が参加できる情報提供のための会議などがある。

4-6. フィリピン国立博物館について

4-6-1. 基本情報

フィリピン国立博物館はマニラ市にある国立の博物館でイントラムロスとリサール公園のちょうど間に位置している。2016年に入館料が全日無料となり、より訪れやすくなった。

コレクションは大きく、美術、考古学、民族誌、自然史の4つに分類され、自然史では動物学、植物学、地質学など多岐にわたる展示を行っている。館内には幾つもの小さな部屋が存在し、その一つ一つにテーマが割り振られており、それに沿った展示が行われている。展示のフロアは4階まであり、すべての作品・展示物を見て回るには半日ほど時間がかかると言われている。

国立博物館は、展示物を通して現地人や観光客にフィリピンの文化や歴史、自然を伝えるだけでなく、芸術作品をはじめとする文化遺産や歴史的遺物、標本の収集、保存、調査などを行う政府公認の機関でもあり、フィリピン国内における文化的活動の中心となっている。

今回の訪問は時間に限りがあり、主に1階と2階の展示物のみ見ることができた。そのため、本報告書ではガイドツアーで詳しい説明を受けた展示に焦点を絞って紹介・報告を行う。

4-6-2. 博物館の建物について

展示物の紹介の前に、この博物館の建物自体について記述する。

この建物は1918年から建設が始まったもので、元々は図書館として利用される計画であった。その後、議会の場として使用されることになり、フィリピン独立における重要な出来事となるタイディングス・マクダフィー法の可決や憲法の批准などがここで行われた。しかし、第二次世界大戦が始まると、その影響で大きく損傷を受け、建物中央部など一部を除いて崩壊してしまった。1946年に再建の計画が立てられ、これにより現在とほぼ変わらない状態となった。その後、1996年になって議会としての使用が終わり、2003年から新たに改装工事が始まり、現在のような博物館としての使用が開始された。

このような沿革があるため、館内の内装もデザイン性に富んだものが多く非常に凝っていた。また、大きな展示物は天井の高さによってそのままの状態では展示することができず、部分部分で分けられて展示されていた。



図 4.6.1 : 博物館外見



図 4.6.2 : 分割されている展示物

4-6-3. Spoliarium について

国立博物館の主な展示物として最も有名なものは **Spoliarium** である。この作品はフィリピンを代表する画家である **Juan Luna** 作で、博物館入口すぐの大きな広間の中央に展示されている。この作品は、ローマ時代のコロシウムを舞台とした空想上のイメージを基にした作品で、見世物として犠牲となったグラディエーターが描かれている。この作品の解釈として、スペインの植民地であったフィリピンを暗に示唆しているというものがある。この解釈から、スペインからの独立運動を行っていた時代の人々にとっては活動のシンボリックな作品であったとも言われている。

作者である **Juan Luna** は、1884 年にマドリッドの美術展でこの作品で金賞を受賞した。これによりフィリピン出身の画家が世界で認められるようになったと言われており、フィリピン美術史における重要な作品であると位置付けられている。

4-6-4. バスタメンテ総督と息子の暗殺について

Spoliarium に向き合う形で展示されている、もう一つの巨大な作品がフェリックス・レシユレシオン・ヒダルゴのバスタメンテ総督と息子の暗殺である。この作品は **Spoliarium** とは異なり、実際に起きた事件を基に描かれた絵画である。しかし、描かれた時期や、世界的に評価された点などは上記の作品と類似している。さらに、この作者と **Juan Luna** は友人同士であった。このことはフィリピンの国民的英雄であり、芸術の才能にも恵まれた **Jose Rizal** が二人の似顔絵を隣同士で描いたことから読み取れる。この作品は国と教会の争いが描かれており、当時の状況を絵から知ることができる。



図 4.6.3:Spoliarium



図 4.6.4:バスタメンテ総督と
息子の暗殺

4-6-5. その他の展示物について

今回詳しく見ることができたのはフィリピン絵画史の初期的な作品や Jose Rizal の作品、第二次世界大戦関連のものなどであった。

初期の作品は宗教画関連のものが多かった。これはスペイン統治時代に絵画のテーマを自由に選ぶことができなかつたことが深く関係している。そのため、この時期の作品は構図が似ているものが多く、キリスト教内の 1 つの場面やテーマを複数人の異なる画家が描いていたという当時の状況がみてとれた。独立後はこのような規制が徐々に外れていき、富裕層の人々の肖像画や、その他風景画などが多く見られるようになった。



図 4.6.5:構図の似た作品



図 4.6.6:日本を題材にした風景画



図 4.6.7:Jose Rizal の肖像画

4-7. ユニカセレストラン

4-7-1. 基本情報

ユニカセレストランは、「ユニカセ・コーポレーション」の活動の一環である。「ユニカセ・コーポレーション」は様々な危険(路上生活、人身売買、虐待や児童労働など)にさらされた子供たち(Children at Risk)の社会復帰と自立を目指して 2010 年に作られた社会的企業である。

ユニカセ(UNIQUEASE=UNIQUE kasi)とは、英語とタガログ語を組み合わせた造語で、「何故なら僕たちは ユニークな存在だから」という意味である。

「ユニカセ・コーポレーション」の主な活動内容は 1. 青少年育成事業 2. フードビジネス事業 3. 子供のサポートプログラムである。これらについては、以下の章で説明をする。

4-7-2. 活動の背景

フィリピンでは、上記でもふれたように様々な危険にさらされた子どもがたくさんいる。現在そのような子供たちを支援するために多くの NGO がサポートを行っている。しかし、18 歳になると NGO によるサポートは終了し、青少年は自らの力でその後の生活をしなければならない。その後の青少年の道は二つある。一つは、仕事に就くことができ、安定して暮らせる生活を得る。しかし、現在のフィリピンは学歴社会であり、人々の貧困層に対する差別が根強いので、多くの青少年が無職となり路上生活に戻ってしまうという状況となっている。そして、このような青少年が子供を授かり、また Children at Risk の子供が増えるという負の連鎖が起こっている。そのような負の連鎖を断ち切り、青少年たちの雇用機会を創出するために「ユニカセ・コーポレーション」が立ち上げられた。

4-7-3. 活動内容

「ユニカセ・コーポレーション」では、現地の NGO で支援を受けている青少年を紹介してもらい、先にも触れた 3つの事業を通して彼らの社会復帰と自立を促している。

1. 青少年育成研修事業(Youth Training Program)

多くの青少年は、最初は日常生活に必要な挨拶や遅刻をしないという基本的なことすらままならない。加えて、貧困下で生活してきた青少年の中には、盗みなどを常習的に行ってきたものもいる。したがって、まずユニカセでは、基本的な生活に必要なスキルや規則を教える。もちろんそれだけでなく、レストランで働くためのビジネススキル(英語やコミュニケーション法、マナー等)や接客スキル、マーケティングを教える。また、それぞれの青少年がもつ夢を叶えるために必要とされる教育に対する支援も行っている。

2. フードビジネス事業(ユニカセレストランの運営)

青年育成研修で学んだことをユニカセレストランで実践として生かすことで青少年がビジネスにおいて必要とされるスキルだけでなく、どんな仕事においても必要不可欠な「働く」

姿勢を深く身につけることができる。ここで働く青少年にはマニラにおける最低賃金よりは少ないものの給料が支払われ、青少年は貧困地域の生活やスカベンジャー(ゴミ拾いで生計を立てている人)よりも安定した暮らしができています。

3. 子供のサポートプログラム

このプログラムでは、NGO で支援を受けている子供たちをユニカセレストランに招き、青少年スタッフとの交流を通して、子供たちに青少年スタッフを社会復帰を目指し努力をしている人のロールモデルとして見せ、将来に希望を持ってもらえるようなイベントを行っている。

また、2013年に青少年育成事業を強化することを目的としてNPO法人「ユニカセジャパン」が設立された。これと「ユニカセ・コーポレーション」が連携をして、講演会やイベントの開催している。(日本では、2016年から11月にJICA地球広場において国際協力・ソーシャルビジネスカンファレンスが行われている)

(2017年開催概要：https://peraichi.com/landing_pages/view/sbasiacference2017)

4-7-4. 青少年スタッフとの交流会

レストランで食事をいただいた後、青少年スタッフと交流会を行った。交流を行ったスタッフの方も様々な理由により以前は Children at Risk であった。現在彼らは、ユニカセで研修を受け、レストランで働きながら自身の夢へ向かって努力しているようであった。私が話を聞いた方はデザイナーを目指しており、研修の傍らレストランが決めている月ごとのテーマに因んだ飾りつけを作り、レストラン内を華やかなものにしていった。彼らに話を聞くと、働いている青少年スタッフは皆ユニカセでの仕事に非常に満足し、何よりも代表である中村さんに感謝しているようであった。



図 4.7.1：スタッフの方と
集合写真



図 4.7.2：食事



図 4.7.3：交流会の様子

4-8. フィリピン大学ディリマン校 (University of Philippines Diliman)

4-8-1. 概要

フィリピン大学は、フィリピンを代表する国立の総合大学で、全国に7つのキャンパスを持ち、1908年に創設された。ディリマン校はその中でも最高峰の大学で、日本における東京大学の立ち位置にある。4.93kmの面積を持ち学士修士博士を合わせて25550人の生徒が学んでいる。この広すぎるキャンパスの中に、大学の施設は点在し、生徒はジープで移動している。キャンパスというよりは町に近く、学生でない人間も多く住んでいる。中には病院やショッピングセンターも存在する。我々はバンに乗って、JICA SATREPSのサイト、ASTI(Advanced Science and Technology Institute), EEEI(Electrical and Electronics Engineering Institute),を見学し EEEIにて学生交流を行った。

4-8-2. JICA SATREPS のサイト

JICAの事業の一貫であるサトレプスのフィリピン支部の研究機関はUPDにあった。ここでは沿岸のブルーカーボン生態系(マングローブ林、海草藻場、沿岸湿地)により固定・隔離される炭素(ブルーカーボン)を対象とした研究を行っていた。地球上の生物による全炭素固定量の55%は海洋生物によるものとされており、ブルーカーボンは気候変動緩和及び適応の観点から注目を集めている。このブルーカーボンを多く保持するコーラル・トライアングル域の中心に位置するフィリピン、インドネシアを対象にJICAがこの事業を開始した。ブルーカーボン生態系に固定・隔離されている炭素量の実態や様々な環境ストレスの下での生態系の変動過程とそれに伴う炭素量の動態などの情報は乏しい。このためブルーカーボン生態系の保全や気候変動適応策と地域の持続的発展を両立させるための政策立案や意思決定に必要な科学的基礎情報は整備されていない。これを解明すべく、フィリピンでは水中の草や生物に対するコドラード法やソナーを用いたフィールドワークを行い、その情報をインドネシア、日本と共有している。最近は実地調査をおこなうだけでなく、リモートセンシングを利用した調査も行っている。

4-8-3. ASTI(Advanced Science and Technology Institute)

ASTI(Advanced Science and Technology Institute)とは、DOST(Department of Science and Technology;科学技術省)直轄の研究所である。フィリピン大学ディリマン校の一部ではないが、大学敷地内に位置している。そこでは、宇宙探査機を用いた観測・研究を行っていた。小型人工衛星「DIWATA-1」はフィリピン初の人工衛星であり、国際宇宙ステーションにおける、有人実験施設「きぼう」から放出されたものである。この衛星は、農業や環境、気象災害の監視など様々な用途に使用されている。

衛星を制作する上で、大変なのは小型化であるという。振動実験をするとネジが取れてしまうなど、試行錯誤を繰り返してきた。

また、地上に設置する雨量計測装置は、災害時の破損を防ぐために頑丈に作られているとの説明も受けた。

4-8-4. EEEI(Electrical and Electronics Engineering Institute)

電気系の研究施設と講義室のある建物で、NOKIAをはじめとしたさまざまな企業から研究設備を提供され、学生はこの機器を使用して実験を行っている。

東京工業大学と比べ、企業と協力体制があるように感じた。また、建物内には宇宙系の実験をするための3階分吹き抜けの大空間があった。講義室と廊下以外に机と椅子を備えた自習スペースのようなものがあり、多くの学生が授業時間の間の時間をそこで過ごしていた。また、UPDでは廊下に座り込んでパソコン作業や勉強をする学生が多く見られた。

4-8-5. 学生交流

EEEIの講義室で、電気系の学生と授業後に交流会を行った。

多くの学生がフランクに話しかけてきてくれて短時間だったが、多くの学生と交流することができた。私立のデラサール大学と比べ、国立だからなのかで学生の雰囲気は東工大生と似たものを感じた。日本に対して興味を持ってきている学生の多くはアニメを見ていて、私よりもよほど詳しい学生達だった。(大貫)

交流会は、教室内で自由な雰囲気の中行われた。私も多くの学生と話しをすることができ、話しの内容も趣味から各自の専攻分野に至るまで、多岐に渡った。日本を訪れたことがある学生は少数だったが、日本への興味・関心が高い学生は多くいた。話しをしていて感じたことは、完璧な文法通りでなくとも、意思疎通は可能であるということだ。積極的に話してみようとする姿勢こそが重要なのであろう。(渡邊)



図 4.8.1 : 学生交流様子①



図 4.8.2 : 学生交流様子②

5. その他

5-1. 食事

5-1-1. 食文化

ほとんどのフィリピンの食べ物は日本人にとってなじみやすい味付けだった。印象的だったことはフィリピン料理には肉を使ったものが多いということである。私たちはこの 10 日間、肉が主食なのではないかと錯覚してしまうほど肉料理をいただいた。時に、健康面を考慮して野菜を求めましたがフィリピン料理には野菜が少ないことに気づき断念することがあった。食文化に関して最も驚かされたことは彼らの食事をとる頻度である。フィリピンでは 1 日に 5,6 回食事をする。私たちはデラサール大学の学生や企業の方々からごちそうさせてもらうと同時に 1 日に 6 回の食事を体験させてもらった。毎度ごちそうさせてもらった食べ物は肉料理や揚げ物が多く、胃がもたれてしまう毎日に耐えていた。文化面においてはフィリピン人の人をもてなす精神にひどく感心した。



図 5.1.1 : 日本人交流会の人たちと食事



図 5.1.2 : デラサール大学の人たちと飲み会

日本では食事をする際、箸を使うのが一般的だがフィリピンでは右手にスプーン、左手にフォークを持って食事をするという日本と異なる文化を持っている。フォークでご飯などの小さいものを寄せ集めてスプーンに乗せる。また、スプーンを使って魚の骨を取り除くこともある。食事をするときの彼らの器用さには非常に驚かされた。

フィリピンではジョリビーというファストフード店が大変有名である。世界中のファストフード業界においてトップシェアを誇るマクドナルドを抜いて、ジョリビーはフィリピンにおいて市場シェア第一位である。人気の理由はフィリピン人の味覚に合う甘い味付けが好評なのだろうと思った。私たちはフィリピン滞在中にジョリビーによく訪れ昼食や夕食を済ませた。豊富なメニューの中でも甘いバナナケチャップを使ったソースが決め手のスパゲティがおすすめである。



図 5.1.3 : ジョリビーの目印



図 5.1.4 : ジョリビー特製のスパゲティ

5-1-2. フィリピン料理

私たちは豊富な種類のフィリピン料理をいただいた。中でも私が気に入ったものを3つ紹介しようと思う。1つ目はレチョン（図 5.1.5）。これは豚を十分な時間をかけて炭火焼きしたもので皮の食感が癖になる料理である。他の料理の値段と比べ、比較的高いと感じた。2つ目はシシグ（図 5.1.6）。シシグには多様な種類があり、大きく分類すると肉が豚か牛かで分別できます。ひき肉の炒めもので少しスパイシーな味付けだった。3つ目はハロハロ（図 5.1.7）。ハロはタカログ語で混ぜるという意味を持っている。名の通り、食べる前にかき混ぜるのがフィリピンでの通例である。中身にはウベと呼ばれる紫色の芋のアイスクリームやゼリー、ナタデココ、各種果物などが入っている。食後のデザートやおやつにおすすめだが、量が多いのでみんなでシェアするのがおすすめである。



図 5.1.5 : レチョン



図 5.1.6 : シシグ



図 5.1.7 : ハロハロ

唯一、私たちの口に合わなかったフィリピン料理はシニガン（図 5.1.8）です。シニガンはエビや野菜をタマリンドという香辛料で酸味をつけたスープです。日本人にとって味噌汁に当たる料理であり、フィリピンでは大変なじみ深い料理です。よく現地の人から嫌いなフィリピン料理は何かと尋ねられました。シニガンだと答えた時の彼らの顔はこわばっているように思えました。



図 5.1.8 : シニガン

5-2. 街の様子

所得があまり多くない人と中流層以上の人の生活区域ははっきり分けられているのではなく、隣り合っていることがわかった。道で商品を出している人がたくさんいて、道路の脇にはたくさんのゴミが落ちているようなところでも一歩建物の中に入れば、明るく照らされ、きれいな店が広がっていた。デラサール大学やモールなどの入り口には警備員が常について、荷物検査を行っていた。

車の数は多く、朝、夜には渋滞に巻き込まれることが普通であった。車の多さゆえに排気ガスもひどく、メトロマニラでは息苦しさを感じ、夜の月は霞んでいた。道路にはあまり信号機がなく、車がスピードを出しやすい状況となっていた。また、信号がないため横断歩道もなく、歩行者は車の様子を見て道路を横断することが普通であった。都市部から遠く離れるほど信号機が少なくなる傾向を感じ、信号機を見つけるとマニラに近づいたと思えるほどだった。



図 5.2.1:マニラでの渋滞



図 5.2.2:路上販売



図 5.2.3:駅の改札



図 5.2.4:中華街

6. 所感

<化学工学科・学部4年>

今回のプログラムには英語力向上と国際交流を目的として参加を決めたが、フィリピン派遣で得られたものは本来の目的以上に多く、今までの人生において非常に密度が濃く充実した体験となった。ここではフィリピンの大学教育と生活環境について私を感じたことを書きたいと思う。

大学の講義を受講する中で、フィリピンの学生は日本の学生と比べて自発的に授業に参加する学生が多いと感じた。日本の講義では、教授が一方向的に生徒に向けて演説する形式であるのに対して、フィリピンでは生徒参加型の講義形態が主流であり、生徒の質問や発言などを大切にしている印象を受けた。このような光景は、生徒同士が授業中に自由に議論しながら講義を受けることが許される風潮と教授陣の工夫された授業の賜物であると考えられる。私は今まで、授業に平気で 5~10 分遅れ、授業中に居眠りをすることも多々あったが、朝 4 時半に起きて 7 時半に始まる 1 限に出る生徒が多くいるという話を聞いたり、授業中に居眠りをしたり携帯をいじる生徒がほほいらない光景を目の当たりにすることで、今までの大学生活を見つめ直す良い機会となった。

マニラの中心部には高層ビルが集中しており、一見繁栄しているように見えるが少し中心部を離れるとスラム街が広がっており、貧しく十分な教育を受けられないストリートチルドレンに遭遇することがあった。マニラ市内のゲームセンターでは、多くの子供たちが横からゲームと一緒に参加したり、ゲームコインを探し周ったりする姿は私にとって衝撃的なものであった。留学前に多少話は聞いていたものの、実際に現地で現状を目の当たりにする中で、世界中の貧富の差の問題に対する考え方が大きく変わった。またこのような問題を解決するための JICA の草の根運動やユニカセレストランの詳細な取り組みについて話を聞くことができ、貧困地域の問題に対する今後の自分の関わり方についてももう一度考え直す必要があると強く感じた。現在私は化学工学を専攻しているが、自分の専門知識を向上していくことで、途上国のインフラ整備や食糧不足問題に取り組み、途上国の抱える問題の解決に貢献したいという気持ちを強く持った。

<経営システム工学科・学部4年>

今回の留学は私にとって初めての海外経験であった。わずか 10 日間であったが、遭遇した 1 つ 1 つの場面が新鮮で貴重な経験となり、多くの事を学んだ。以下、私の感じた事を 3 点述べる。

1 つ目は英語力の重要性である。以前から英語が大切とは感じていた。しかし今留学を経て、英語が必要不可欠と改めてより強く気付いた。フィリピンの学生や、韓国やベトナムからの留学生と交流したが、彼らは皆、流暢に英語を話していて、英語レベルの差を痛感した。学生との交流や講義、様々な訪問先でのお話など多くの場面において、私の英語力不足により、話を理解できない悔しさ、もどかしさを感じた。グローバル化が進む中で、日本発信の情報

だけでなく、海外発信の情報を獲得する事はとても重要だ。今回得た悔しさを胸に、今後も積極的に英語に触れ、読む、書く、話す、聞く、これら全ての能力向上を目指す。

2つ目は途上国支援についてである。JICA、UNIQUASE では途上国支援に関するお話を聞いた。印象に残っているのは、JICA の「草の根事業」、そして UNIQUASE での「一人一人と深く関わって支援していく」、という事だ。これらの活動はマクロな視点を持ち大きく世の中全体を変えるという物ではない。しかし彼らはミクロ的活動を行いながら、いかにしてその効果を最大化するか、どうすれば目の前の人々を助けながら、世の中全体に影響をもたらしていくかという事を考え続ける事が重要とおっしゃっていた。これは私が以前から抱えていた疑問の答えを見つける鍵となりうる話で、今後も深く考えていきたい。

3つ目は知識の幅である。様々なお話を聞くうえで、そのお話の背景となる知識の幅広さの重要性を感じた。また、移動の車内では、1年生や高田先生を中心に様々な議論が活発に行われていて、1年生の知識量やその知的探求心に私は感心してしまった。今後は知的好奇心を持ち、より深く物事を考えていきたいと感じることができた。

最後になりましたが、我々を引率して下さった高田先生、Eden 先生、そして各種手続きや事前学習でお世話になった柳さんをはじめ、本留学に関わって下さった全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

<建築学系・学士課程2年>

フィリピン派遣が決定した時は、正直とても不安だった。治安が悪く、渡航するには危険だと思っていたからだ。しかし、旅行ではなくこの超短期派遣でしか見られない場所を訪れれば自分の視野も広がるのではないかと思い、参加した。実際この10日間のプログラムはとても充実していて、私の視野を大きく広げ、フィリピンのイメージを大きく変えるものになった。

もっとも印象深かったのはフィリピンの人々だ。店の店員も、学生たちも皆フレンドリーで暖かく日本人を迎え入れてくれた。特に今回のプログラムは交流の時間が十分に設けられていて、大学が終わった後も、声をかけてくれたのはとてもありがたかった。拙い我々の英語にも付き合ってくれたおかげで、英語づけの10日間を過ごすことができた。どこの訪問先でも、スナックと言って麺やバナナのフライを出してくれたのは驚きだった。日本は2020 東京五輪でおもてなしを打ち出しているが、果たしてそれは全面にアピールできるものなのかと疑問に感じた。おもてなしの精神はアジア諸国では当たり前で、決して日本の誇れるものではなく、むしろ向上させなければならないものなのではないかとさえ感じた。

一方で、もちろん途上国ならではの問題も多くあった。日本とは違い、インフラの整備が不十分でトイレに紙は流せないのが当たり前、雨季にはマニラ市街地が水浸しになることもあると言う。また、市街地は渋滞が多いにもかかわらず、排ガスのフィルターの性能が悪いのか、ジープニーからは白い煙が出ていて空気は臭かった。マニラには綺麗に整備されたモダンな建物とトタンで出来た今にも倒れそうなスラムが混在している。しかし、スラムは

私が想像していたものとは違っていた。当たり前だが、スラムにはその生活があり、家族で生活している人々がたくさんいる。歩道は路上で生活する人々で溢れていて機能していなかったが、その人々はコミュニティの中で買い物をし、彼らを見ていて自分の生活と大きな隔たりがあるようには感じなかった。皆それぞれが厳しい環境の中でも笑顔で生活していた。西欧諸国で見てきた路上生活者や難民とは違い、何か明るさを感じられた。少しの技術支援で希望を持って生活しているフィリピンの人々の生活の質は大きく向上できるのではないかと思えた。同じアジアの人間として、通じあうものがたくさんあった。今までの日本は西欧やアメリカに追いつこうとばかりしてきているが、今後は東南アジアにもっと目を向けてもいいのではないかと思った。

<生命理工学系・学士課程2年>

初めてのフィリピン渡航を経て、私は日本国内では学ぶことができない多くのことを学ぶことができた。ここでは所感として発展途上国が直面する問題、及び現地の人々の大きなエネルギーについて記すことにする。

フィリピンは今まさに急速に発展を遂げている一方で、かつて日本が同様に経験したような課題に直面していると感じ取ることができた。というのも、マニラおよびその周辺の地域はきれいに整備された環境であるとは言い難かったのである。道路を見ると常に車であふれかえっていた。大気が明らかに汚染されているということを感じ取ることができた。それに加えて、町中の至る所に貧困に苦しむ人々がたむろしていた。このように、国の発展によって大きな恩恵を受ける人がいれば一方で負の影響を受けざるを得ない人もいるという事実を自分の目で見ることは私にとって貴重な経験となった。

また一方で、このフィリピン渡航では現地の人々の明るく活発な様子を見ることができた。現地の大学生は日本から来た東工大生に対して親切に話しかけてくれた。その上、私たちが言いたいことをうまく英語で表現できないときも彼らは私たちの話に耳を傾けてくれたので、コミュニケーションをうまく成立することができた。彼らが幼いころから身に着けた、このような外部の人間を受け入れ順応する姿勢を私たちは見習わなければならない。なので私は今回の渡航を通して実感した文化を超えた交流を今後も忘れることないようにしたい。

今回のフィリピン超短期派遣では特に大きな問題が起こることもなく終了することができた。この素晴らしいフィリピン超短期派遣の引率をしてくださった高田先生およびエデン先生、留学情報館の柳さん、デラサール大学およびフィリピン大学の方々、TechAguruのスタッフの方々、そしてともに渡航に参加した11人の学生に感謝を申し上げたい。

<生命理工学系・学士課程2年>

海外への渡航は私にとってほぼ初めての経験だった。唯一高校の時に行ったニュージーランドでの研修は周りに日本人しかおらず、今回のように積極的に英語でのコミュニケーションを取ろうとした留学は初めての事だった。元々海外への興味はあったのだが英語が喋れないということもあり中々行こうと決意するに至らなかったのだ。

フィリピン短期留学を経ての所感を書くにあたり最初に言いたいことは新たな事に挑戦し続ける事が人生の豊かさに繋がるのだという事だ。私がフィリピンへの留学を志したのはスリランカへと夏に短期留学をした後輩に勧められたからなのだが、最初に予想していたものよりも素晴らしいものだった。

まず今回の研修で得た経験から学んだ事の1つは私が切に感じたのはやはり英語力の必要性だ。向こうの学生と喋りたいのに彼らのスピードについていけず最初はとてもショックを受けた。彼らはとてもホスピタリティに溢れた人ばかりでだからこそ彼らともっと仲良くなるために英語力を磨きたいと思った。再び海外へ行き今度こそ英語でより意思疎通を図るために今後大学生活の中で英語の勉強をもっと増やしたいと思う。

また、私が生きていくにあたり常々思うことなのだが、その自分の人生の価値というのは幸福度によって測るべきだということである。もちろん刹那的な話をしている訳ではないがフィリピンに住む人々は常に幸せそうな顔をしていた。日本に多い疲れた顔の人は少なかった。私の人生に求めるべきものの答えのヒントが見つかったような気がした。

具体的な新しい経験はここでは挙げきれない。最初に述べた通り、人生は多くの新しい経験によってより豊かになる。フィリピンで得たような新たな経験、発見、知識、を常に増やし続けるためにはやはり留学をして異国文化に触れることが最も近道であると感じた。また新たな国で新たな経験をしたいと思う。

<経営工学系・学士課程2年>

私は今回の超短期派遣プログラムに参加するまで、旅行を含めて海外に渡航した経験がなかった。つまり外国に対するイメージは、各種メディアや伝聞を基にしたものに過ぎず、実際に海外に行ってみたいとの願望はずっと持っていた。しかしながら、せっかく行くのならただ観光をするだけではなく、海外の大学で講義を受けたり、同年代の海外の大学生と交流してみたいとも思っていた。そのため、今回のプログラムを知ると、迷わず応募した。フィリピンを選んだ理由は、英語が公用語である(英語力が向上すること)と、アジアの中でも経済的に急成長をしている国だからである。

フィリピンでは、当たり前のことだが、何をするにも英語で話さねばならなかった。英語は何年間も学習してきたはずだが、ファストフードで注文をするのも一苦労だとわかった、さすがに危機感が芽生えてきた。読み書きはある程度出来ても、話す聞くは難しい。ゆっくり話してもらうことでようやく聞き取れた。

また、今回のプログラムでは、講義受講と合わせて学生交流も目玉の一つであった。現地

の学生とたわいもない話から、将来についての真剣な話まで、多くのことを話すことができた。日本に対して興味や関心が高い学生も多く、そこは話していて楽しかった。交流という点では、3月8日の夕食後、ユニカセレストランという場所で、元ストリートチルドレンや、昔ネグレクトにあっていて方(現在は二十歳前後)と交流する機会が設けられた。現在はユニカセレストランで従業員として働いているが、小さい頃は相当大変だったという。フィリピンは、確かに経済発展が著しいが、経済格差は日本以上に存在している国である。私たちは、Eden先生と共に、スラム街を(車に乗りながらだが)訪れた。日本では見ないショッキングな光景がそこにはあり、経済弱者への支援の必要性を強く感じた。この点は、日本のODA開発とも合わせて今後学習していく必要があると思う。

加えて本プログラムでは、東工大大学院生で、派遣交換留学生としてデラサール大学で学んでいる先輩とお話をする機会にも恵まれた。やはり、数ヶ月フィリピンで生活をしていると、英語も相当上達するそうである。今回は短期派遣であったが、来年度以降、より長期の留学に挑戦していこうと思う。

<第6類・学士課程1年>

まず、今回のフィリピン超短期派遣留学は10日という短い期間でありながらも、非常に充実したものであった。初めての海外であったが、日本語のほとんど通じない環境というのは僕にとって新鮮で面白いものであった。このプログラムを通して、僕は多くのことを学び、自分の将来へ向けてのよい経験となったと思う。

第一に、フィリピンと日本の違いに驚かされた。実際にマニラの街並みを見て、先進国の首都である東京との違いが非常に多いと感じられた。9日目に見たがホテルのすぐ近くにもスラム街があり、道路わきには多くの露店がある。また、他の国を知らないので一概には言えないが、思っていたよりも道路状況が良くなかった。やはり何らかの形で国際開発事業の入り込む余地が多くあると感じた。また、文化的な違いも多くみられた。日本人学生もすぐに慣れてしまったが、フィリピンタイムは僕としては良いものだった。というのも、あまりにも時間に厳しすぎるのはストレスのかかることであるからである。また、文化的な違いで最も驚いたのは食事である。1日中暑くエネルギーの消費が多いため、甘いものや脂っこいカロリーの高いものを食べ、お菓子を含めると1日6食も食べているというのは、日本では考えられないことだった。また、フィリピン学生との交流の中でフィリピンの人は、フレンドリーで非常にホスピタリティが高いと感じた。

第二に、将来関わりたいと考えている国際開発について、フィリピンを実際に見たことやJICAやユニカセレストランへの訪問から学ぶことができたと思う。最も印象に残っているのはユニカセレストランについて聞き、子供たちに対するNGOの支援というのがあまり将来の仕事につながっていないというのが驚きであった。僕は支援が足りていないことを想定していたのだが、NGO等の支援がうまくいっていないという現状は全く頭になかった。また、途上国でさえ貧困層に対する差別があるというのは衝撃的であった。ユニカセは、ビ

ビジネスとして少人数であるが青少年の支援をうまく行っているということに感嘆し、貧困層に対する支援が将来的に自分自身で自立できるようなシステムを作ることが重要であるのだと感じた。今まで僕は国際開発に関わりたと思ってきたものの、それ自身に無関心すぎたと感じた。もっと国際開発の色々なケースや途上国の国自身について、それまでの歴史、現在の日本との関わり合いについてなど知らなくてはならないことが沢山あると思い知らされた。上記以外にも、実際に現地に行かなくては感じられないことが多くあった。今回の経験を今後の学業やサークル活動、将来の仕事に役立てていきたいと思う。

<第6類・学士課程1年>

日本に到着し、自分の部屋に帰ってきたとき、そのあまりに狭い世界に私は少し戸惑った。それくらい今回の短期派遣はあまりに大きなものであり、自分では処理しきれないくらいの物事がいっぺんに頭の中に入ってきたのである。

まず衝撃だったのが、トイレである。一見普通のトイレであるが、実は使ったトイレットペーパーを流してはいけないという。流さずにそばにあるごみ箱に捨てるというから驚きだ。どうやらトイレットペーパーをトイレに流せないというのは東南アジアでは常識だという。中にはトイレットペーパーすらないトイレすらあった。(このようなトイレは備え付けのホースで洗浄するらしい)日本での常識がいきなり通用しないとは、と改めて海外に来たのだなと感じる出来事であった。

ほかにも、交通事情は日本とは大きく違っていた。クラクションを鳴らすのは当たり前、割り込みしないと進めないという状況である。道路を渡るにも横断歩道が少ないので車が来ない隙を狙って渡るしかなかった。それ故かやはり交通事故は多いという。しかし、よく考えると日本も「交通戦争」と呼ばれる時期があったことを考えればそれ程不思議ではないというか、過去の日本を見ているようだった。

逆に、日本とは違いフィリピンの人々は非常に親切だった。つたない英語でもこちらに合わせるし、愛想も非常によい。特に感動したのが、どこへ行っても食べ物が出てくることだ。大学を訪問しても、企業を訪問しても、何かしらの食事が出る。フィリピンの方のおもてなしは日本よりはるかに上だと感じた。逆に言えば日本のおもてなしは自己満足としか考えられない、そこまで言っても過言ではないほどである。現代日本人は昔に比べて冷たいという話を聞くが、日本は経済成長で大切なものを失ってしまったのかもしれない。

フィリピン超短期派遣を通じて、もちろんグローバルや全世界的な考え方も身についた。しかし、それよりも改めて「日本」を考える機会が多かった。フィリピンが新興国であることもあるが、経済成長で日本が失ったもの、そしていま日本にないもの。反対に改めて日本の凄さを感じるところが多々あった。

最後にこの短期派遣にかかわったすべての方に感謝したい。ありがとうございました。

<第1類・学士課程1年>

私は同様のプログラムで昨年の夏にスリランカへ行った。そのときの派遣でも私は色々な体験することができた。スリランカで海外の学生と会話できることがとても楽しいと知り、今まで知らなかった生のアジアを肌で感じるすることができた。そんな私がなぜ今回同様にアジアの国であるフィリピンの超短期派遣に参加したのか、その理由は二つある。一つは単純に楽しかったからだ。正直に言って大学生活をおもいきり楽しめていなかった僕にとってスリランカでの10日間は輝かしいものだった。二つ目はその輝かしい10日間を体験のまま終わらせてしまい、自分の経験として吸収できていないと感じていてそれが悔しかったからだ。(もちろんお財布に優しいという理由もあったが) 以上のような思いの下、応募したはいいものの出発前後の私のモチベーションは十分ではなかった。たどりついたフィリピンに最初に抱いた感想は「なんだか日本に似ている」というものでスリランカの時ほどの感動は無かった。

しかし私のフィリピンに対する思いは日に日に変わっていった。最初に衝撃を受けたのはデラサール大学でのディスカッションの授業である。与えられたお題に沿って二つのグループに分かれ議論をするのだが、彼らは意見を出すのがとても早くものの十数分で意見をまとめ議論を繰り広げていた。このスピード感は日本の学生も見習うべきだと感じた。次に英語での議論が自分にもできたということがとても自信につながったと感じている。大学やJICA、ユニカセレストランなどでプレゼンをして頂いたり、美術館や大学の案内をして頂いたりする機会が今回の派遣ではたくさんありその時々で積極的に英語を使い質問をすることができたことがとても良かった。旅をともにした仲間たちは積極的な性格の人が多かったのも、恥ずかしがらずに発言できた一つの理由であると思う。

今回の超短期派遣で私はスリランカではできなかった貴重な体験をすることができたと思う。将来の具体的な展望が見えてきたわけではないが英語を話すことにとても自信が付き、広い視点を持って国際社会に貢献していきたいという思いがとても強まった。この体験を経験に変えるべく高い意識を持って新学期に臨んでいきたい。

<第7類・学士課程1年>

今回、このプログラムで私が個人的に印象に残ったことについて書こうと思います。それは英語に対する内面的な変化で、このことは派遣期間中全体を通して深く考えたことでした。まず、よく言われることですが、日本では英語はひとつの教科として紙の上で勉強するものと捉えられがちです。しかし、このプログラム内では現地の学生やスタッフ、街の人々と英語を使ってコミュニケーションをとることが多く、英語を生きた言語として捉えられることができる、いい機会であったと思います。元々、私には外国人の友人がいて、英語を使う機会は多かったですが、今までは文法や単語といった英語自体に気を取られながら話していた節がありました。頭では、英語はあくまでことばで、それを使ってコミュニケーションをとることが大切であることを分かっていたのですが、無意識に完璧な英語を話そうと

していた自分がありました。しかし、今回はネイティブであるフィリピンの人達の英語力や、彼らの優しい人柄に頼って自分なりのことばで自由に話してみようと思いました。少しの間違いや言葉に詰まってしまうこともありましたが、完璧でなくても通じるということが分かると、以前よりもずっと自然に、感情や伝えたいことがスラスラと口から出るようになっていました。今までモヤモヤと心に引っかかっていたものが取れて、「英語は言語だ」ということがずっと飲み込めるようになりました。

ここまで、留学体験談などでよくあるテンプレート的な文章でしたが、このことが本当に私の中で一番の印象に残った出来事でした。また、もう一つ言えることはこの変化はフィリピンに行けたからこそ得られたのだということです。それはフィリピン人の、似た文化を持つアジア人であることの安心感や、その一方で英語が流暢であること、そして一番の大きな要因である、陽気で心優しい人柄があったからだということで、これからの私の中でとても大きな収穫物であったと思います。このプログラムに参加できてよかったです。ご協力いただいたすべての人に感謝したいです、ありがとうございました。

<第7類・学士課程1年>

今回の派遣プログラムを通して国際協力に強い関心を持つようになりました。私はこれから遺伝子組み換えを専門に励んでいこうと考えています。将来、私の専門で食糧難に直面している貧しい人たちのために過酷な環境でも耐えることができる穀物を作り上げ、途上国の発展に貢献していきたいと思うようになりました。そして、発展を遂げた途上国が日本のさらなる発展を促してくれることを期待しています。そんな私の夢をかなえるために今しなければならないことは山ほどあると思います。専門知識の蓄積はもちろんのことですが、それ以外のものを2つ述べます。

1つ目は英語力の向上です。途上国の需要を明確化するためには現地の人々からの意見を直接聞く必要があると思います。また、現地の環境に適した穀物の作製に成功しても育て方を一から丁寧に説明し、注意点を伝えられる能力がなければ研究の成果が無に終わってしまうので英語力の向上は必須だと考えています。

2つ目は多様な文化に適応する柔軟力です。日本とは異なる文化を持つ途上国に日本と全く同じ技術を導入しても拒絶反応を起こすかのようにかえって悪影響を及ぼしてしまう可能性があります。例えば宗教の問題があります。アメリカなどのキリスト教国では遺伝子操作の規制が宗教上の理由により厳しくなっています。そういった文化の違いを把握し妥協案を導いていくために異文化に対応するための柔軟力は必要だと思います。これからは多くの国を訪れ、自分の専門を生かしながら異文化を観察していこうと思います。

今回の派遣プログラムは国際的に働くことがどういうものかを考えさせるいい機会となりました。また、自分の専門知識が途上国に貢献できる可能性を見いだせたので、これからの学びの方針を立てやすく感じました。留学を経て自分の成長に気づく友人もいて、このプ

プログラムは自分を成長させるための第一歩になったのだと帰国してから思いました。短い期間ではありましたがこのプログラムは私にとって実りあるものとなりました。

<第2類・学士課程1年>

フィリピンの人々の優しさにたくさん触れることができ、充実した10日間でした。フィリピンでは、どこへ行ってもあたたかく笑顔で私達を迎えてくれ、また軽食を用意してくださる方々もいて、おもてなしのころを感じました。フィリピン人の方はみんな、笑顔が素敵だったことも印象に残っています。日本人の気遣いのあるおもてなしだけでなく、フィリピン人の普段の生活の中で自然に行われている暖かいおもてなしがあることを知ることができたのはよかったです。

マニラにはたくさんの車があり、渋滞が起きていることも頭ではわかっていたのですが、実際その地に自分の足で立ってから気づいたものもありました。朝から夜までどこかでなっているクラクションの音、たくさんの車から出ている排気ガスによる息苦しさなどです。排気ガスに関してはただ単に車の数の多さが原因なのか、排気ガス用のフィルターなど技術の問題なのか、などとても興味が湧きました。そして、東工大に通わせてもらっていてこれから知識や技術を勉強する立場にいますので、それらを活かしてフィリピンの空気をもう少しきれいにするなど、今回暖かく受け入れてくれたフィリピンの何か手助けになりたいと思いました。

この超短期海外派遣が私にとって初めて海外でした。発展途上国であるフィリピンでの生活を体験して、フィリピンの生活だけでなく、日本のインフラがいかに整っていて便利な生活を送ることができていることなど日本の良さにも気づくことができよかったです。発展途上国は国によって、発展具合、現段階での強み、弱みがフィリピンとはまた異なり、国それぞれで特徴がありそうなので、今後、超短期海外派遣プログラムを通して発展途上国へ訪れたい、自分の目で確かめたいと思いました。

最後になりますが、今回引率して下さった高田先生、Eden先生、並びに各諸手続きをフォローして下さった留学情報館の柳さんには大変お世話になりました。現地で訪問させていただいた大学・企業の方々にも手厚いおもてなしで快く歓迎していただきました。また今回一緒に参加したメンバーはみな志が高く、気さくにコミュニケーションを取り合うことができるメンバーで、刺激のある渡航になったと同時に、大変実りのある経験にすることができました。この場を借りて今留学でお世話になったすべての方に厚く御礼を申し上げますとともに結びとさせていただきます。ありがとうございました。

<参考>

<3. フィリピンの概要 >

外務省 www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/

外務省 海外安全ホームページ www.anzen.mofa.go.jp/info/pcsafetymeasure_013.html

Philippines Population Pyramid <https://www.populationpyramid.net/philippines/2016/>

国土交通省

http://www.mlit.go.jp/totikensangyo/kokusai/kensetsu_database/philippines/

農林水産省

www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/k_gaikyo/phi.html

各国の国土政策の概要 国土交通省国土政策局

<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/international/spw/general/philippines/>

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング

www.murc.jp/thinktank/economy/analysis/research/report_150317

<4-1. デラサール大学 >

<http://www.dlsu.edu.ph/>

<4-2. タガイタイ(Tagaytay) >

<http://skyranch.ph/>

<https://www.museo-orldina.org/>

地球の歩き方 フィリピン マニラ セブ 2018-2019、p.143-146

<4-6. 国立博物館 >

<http://www.nationalmuseum.gov.ph/#page=page-1>